

会議結果報告書

| | |
|--------------------|--|
| 会議の名称 | 平成 28 年度第 2 回札幌市子ども・子育て会議 |
| 日時・場所 | 平成 29 年 2 月 3 日（金）10：30～12：00 札幌市役所本庁舎 16 階 第 1 特別委員会会議室 |
| 出席委員 20 名/30 名中 | 安藤慎也、上田厚子、大久保薫、岡田光子、梶井祥子、金子勇、齋藤寛子、品川ひろみ、柴田田鶴子、須藤桃代、田中貞美、秦直樹、林進一、松本伊智朗、松本直子、桃野秀之、山田暁子、吉田賢一、若松尚代、渡辺元 |
| 傍聴者数 | 3 名 |

| 議事 | 概要 |
|---|--|
| 1. 札幌市子ども・子育て支援事業計画に係る教育・保育分野のニーズ再調査結果及び今後の対応方針について | <p><事務局説明></p> <ul style="list-style-type: none"> ・札幌市子ども・子育て支援事業計画に係る教育・保育分野のニーズ再調査結果及び今後の対応方針について、資料 1 に基づき説明。 ・事務局から提案した、今後の対応方針「現行の計画の見直し」、「審議方法」について、会議の了承を得た。 <p><主な委員質問・意見></p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもを預けて働きたいお母さんが、子どもを預けられずに働けない現状がある。現状をふまえて審議いただき、前向きに見直しをしてほしい。 ・見直しをする場合は、不足している供給量を増やしていくことが基本となるのか。また、供給量がニーズ量を上回っているところについては、現状維持とするなどの方針はあるのか。 <p>⇒詳細な対応策については、認可・確認部会の審議を踏まえて決定していきたい。大きな考え方としては、供給量が不足している部分については、供給量を増やしていく必要があると考えている。様々な方法が考えられるため、限定せずに幅広く対策を考えていきたい。例えば、施設の新設や定員の増加、色々なサービスの拡充、1号認定の供給量の余剰部分を活用した幼稚園の預かり部分の拡充などが考えられる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・見直しにあたっては、保育の量とあわせて、保育の質を確保することも含めた議論をお願いしたい。 ・待機児童の問題は、過去数年間、議論されており、様々な可能性を探ってきている。今段階でさらなる見直しということだが、頭打ちなのではないか。さらなる可能性について、具体的にどのように考えているのか。抜本的な見直しが必要ではないのか。 <p>⇒ニーズ量の増加の要因の一つとして、女性の社会進出等が進み、共働きの世帯が増えていることが考えられる。また、保育所ができると、預けたいという潜在的なニーズが増えることも要因と考えられる。具体的な対策としては、幼稚園の空き教室を活用して幼稚園の中に小規模施設をつくることや幼稚園の認定こども園への移行をより進めていくこと、企業主導型保育事業を供給の中に盛り込んでいくことが考えられる。</p> |

| | |
|--|---|
| | <ul style="list-style-type: none"> ・子どもを保育園に預けて働く親のスタイルが、子どもが小学生になった段階で急に変化しないように、就学後の子どもを預かる体制についてもあわせて計画の中に盛り込んでほしい。 ・保育園の器の問題だけではなく、働き手の保育士の確保についてもあわせて検討してほしい。 <p>⇒保育士の確保は、重要な問題であると捉えている。施策としては、養成校に通う学生向けの就学資金の貸付制度や潜在保育士を掘り起こすための保育所向けのハローワークとして保育士・保育所支援センターの開設を行っている。さらなる確保に向けて、今後も取り組んでいきたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育士が大変な仕事で処遇も良くないと最近言われていることについて、処遇改善を進めていくという意味ではプラスだが、それを聞いて後ずさりする親御さんや高校の先生のアドバイスが、学生にとって大きく影響しているようである。どの養成校も志願者が減っているということが大きな問題となっている。 ・社会全体で保育士の仕事の位置づけを上げていき、皆さんに理解してもらわなくてはいけない。ただ世話をするだけで誰でもできる仕事のように思われることがあるが、専門性が問われる仕事である。 ・ニーズ調査の結果では、保育ニーズが増大し、教育ニーズは低下しているように見えるが、市民の方は、長時間保育でしっかりと教育してくれることを望んでいる。 ・北海道の上士幌町では、ふるさと納税の寄付金で使い道の指定が無いものを子育て支援や少子化対策の基金に積み、認定こども園を無料にするなどした結果、減り続けていた人口が増加したという新聞記事を見たので、参考にしてほしい。また、他の自治体にふるさと納税をする人が増えることで、札幌市の税収が減ることについてどう考えているか。 <p>⇒出生率の問題等については、未来創生プランを策定し、市を挙げて取り組んでいる。保育料や金銭的な負担の部分については、新年度から3歳未満の第2子の保育料の無料化を始めるなどできることから着実に取り組んでいるところ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育士の仕事の魅力をアピールして、専門性の高いやりがいのある仕事だということを幅広く知ってもらう必要があると思う。例えば、札幌市の教育の一環として、保育士が高校に行き、職業の専門性、やりがいの話をすると良いのではないか。また、広報さっぽろで、保育士の写真付きのインタビュー記事とあわせて処遇改善などについて載せることで、イメージアップや社会的地位の向上にもつながっていくと思う。 ・自治体の取組として、男性保育士が働き続けやすい環境づくりに取り組むことも課題の一つではないかと思う。 |
|--|---|

| 報告 | 概要 |
|--------------|---------|
| 1. 「仮称）子ども貧困 | <事務局説明> |

| | |
|------------------------------|--|
| <p>対策計画」に係る実態調査の実施状況について</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・「(仮称) 子ども貧困対策計画」に係る実態調査の実施状況について、当日資料1、1-①、1-②に基づき説明。 <p><主な委員質問・意見></p> <ul style="list-style-type: none"> ・貧困の問題と児童虐待は密接な関係があり、「日ごろ立ち話をするような付き合いのある人」という設問で「いない」という答えが、子ども2歳の区分では約15%とある。これは、児童虐待にかかわることが背景としてあるのではないかと思う。また、保護者が、社会との関わりが希薄であることと、養育能力が低いこととのつながりは、他の資料でも把握しているので、多面的、総合的に報告する上でも、ヒアリングで聞き取ったことについて詳しく書いてほしい。 ・座談会の回数、対象人数、主催者について伺いたい。また、ワークショップは具体的にどのようなことを聞き取るのか。相対的貧困が意欲的格差につながっているという指摘が研究者からもされていることから、その辺の聞き取りを具体的に行えるワークショップにしてほしい。 <p>⇒複数回実施する予定。高校生以上で奨学金を現に受けている方、学校を卒業して、かつて奨学金を受けていた方、可能であれば、生活保護を受けている家庭のお子さん、ひとり親の家庭のお子さんなど、幅広く集まって意見ももらいたいと思っている。</p> <p>⇒高校生の選び方の方針はあるか。</p> <p>⇒奨学金を受けている方の集まりに声をかけて参加してもらいたいと考えている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・奨学金を返還している社会人も集めて、返還の大変さなどについても話せるワークショップにしてほしい。 ・日ごろ立ち話をするような付き合いのある人がいない人について、子どもにも当てはまることだと思う。話さない子どもや不登校の子、ひきこもりの子などの声も拾い上げてほしい。 ・子ども2歳の区分は調査方法が郵送であったが、施設を通じて回収した年齢層と同じくらいの割合であり、回収率が高い。特に子ども2歳の区分の方が関心をもって調査に協力いただいたことを押さえておく必要がある。また、この年齢層は孤立しがちな人が多いということもある。保育のニーズが高いところも、この年齢層である。保育も子どもの貧困もこの年齢層がターゲットになってくる。今後、集計を進めていき、母子保健ベースだけではなく、福祉・保育ベース、あるいはほかのところも含めて、議論をしていかなければいけない問題が見えてくると思う。 |
| <p>2. 各部会の決議状況について (報告)</p> | <p><事務局説明></p> <ul style="list-style-type: none"> ・里親の認定及び2ヶ月を超える一時保護について、児童福祉部会、処遇部会の開催状況を資料2に基づき説明。 ・母子生活支援施設整備計画の承認について、児童福祉部会の開催状況を当日資料2に基づき説明。 <p><主な委員質問・意見></p> |

| | |
|--------|---|
| | <ul style="list-style-type: none"> ・母子生活支援施設整備計画の承認について、児童福祉法の改正やそれを受けての市町村の実施体制の整備について、厚生労働省で議論が進んでいる。特定妊婦への支援が大きな政策課題になってきており、居住型の支援が必要であろうということが一つの政策課題になってきている。このときに、母子生活支援施設は一つのリソース（資源）になる。この計画はそのことの議論があって建てかえということではないが、全体の進め方として、建てかえの時期には、政策動向をにらみながら、今後のあり方も含めて全体で議論すべきではないかという意見が児童福祉部会の中であった。 ・母子生活支援施設について、世帯の入所率や対象者数について、どのように把握しているか。 <p>⇒今回、増改築をするあいりん荘については、常時 80%を超える入所率である。札幌市全体で、6施設運営しているが、全体でも常時 80%前後の入所率である。年間を通じて常時出入りがある施設であり、適当であると捉えている。</p> |
| 3. その他 | <p><事務局説明></p> <ul style="list-style-type: none"> ・第2次札幌市児童相談体制強化プラン策定に向けた進捗状況について、説明。 <p><主な委員質問・意見></p> <ul style="list-style-type: none"> ・虐待通告があった中で、半分くらいが虐待と認定されるということだが通報されたが虐待ではなかった方々へのフォローはあるのか。 <p>⇒虐待通告を受けた全件について、保護者や子どもの安否を確認して状況を調査している。その中で、周りの方からの心配する声だけで、実際には虐待はなかった場合もある。虐待ではないが、子育てについて保護者が困っている場合などは、継続して児童相談所が関わることを提案して、フォローに努めている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・通告された後のお母さんたちは、虐待でなくてよかったでは済まなく、子どもを泣かせることや泣いてしまうことへの不安、ご近所に対する疑いや不安につながってしまう。子どもを育てることや第2子、第3子を産んで育てていく自信の喪失につながっていく傾向も見られる。 ・通告した方に、虐待ではなかったという知らせが行くのか伺いたい。虐待ではなかったということを通告者がわからなければ、同じことが繰り返されるという不安もある。人によっては、元気に暮らせる方もいるが、子育てに自信がなくなってしまう方もいる。子育てしやすい社会を目指している反面、そういうところで子育てのしにくさを感じている方もいることを知っておいてほしい。 <p>⇒通告された方に調査の結果を伝えることはしていない。通告があった段階で、お答えできない旨の説明をしている。</p> |